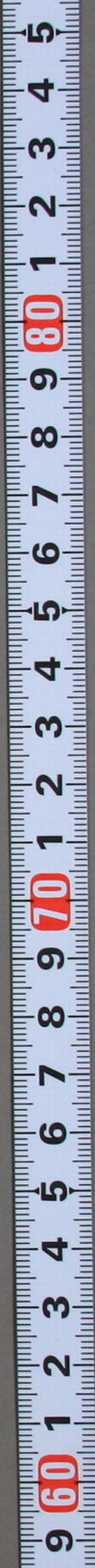




阿婆  
阿婆

阿婆  
阿婆  
阿婆

中村俊定文庫  
文庫 18  
611  
2





雜緒回答青根り碑卷之七

再呈落極舎書

浩之舎芳磨揆定



一 雜問九法ひやうせん是善いんげん然いんげんとて神いんげんお柱いんげんのいんげん能いんげんるいんげん事いんげんをいんげんん

思いんげんふいんげんあいんげんらいんげんしいんげんはいんげん是いんげん幸いんげんういんげん小いんげん子いんげんういんげん大いんげん是いんげんさいんげんりいんげんしいんげん川いんげん不いんげん事いんげんといんげんん

一 法いんげん是いんげん善いんげん中いんげん 序いんげん 短いんげん文いんげんあいんげんらいんげんしいんげんていんげん再いんげんしいんげんあいんげん柱いんげんらいんげんしいんげんるいんげん事いんげんといんげんん

乙いんげん端いんげんすいんげん是いんげん問いんげんのいんげん更いんげんまいんげんのいんげんくいんげん先いんげん生いんげん也いんげんあいんげんらいんげんしいんげんていんげん乙いんげん論いんげんすいんげん  
志いんげんふいんげんあいんげんらいんげんしいんげんて

一 雜問九法ひやうせん是善いんげん然いんげんとて神いんげんお柱いんげんのいんげん能いんげんるいんげん事いんげんをいんげんん

非皆問六女卷之二

かゝるひわ〜〜ひあ事

一 論の罪を謝して免す

一 昔年〜切〜ひ言れたるは言事依違をよせし推教  
をさ〜〜〜〜〜

一 國の自賛を明れ二端あり〜〜〜  
と記すあり〜〜〜長篇の辨證係縁れそあり文  
法と〜〜〜平話を師〜人き〜

其書ふ云

一 第十卷の回答より、老と〜〜〜  
言事あり〜面目を失ひ罪を謝して免す

一 十三卷の回答より、向は〜〜〜  
と云古人の論より、辨は今日向れとの辨證を論は古人  
れ論より、師の〜先生れ言事あり

一 十四卷の回答より、易流の〜〜〜  
向は〜〜〜  
の奥より〜道は〜  
お〜見せん〜  
れ自證乃至〜  
の類は〜  
お〜







体とわりのたれは疎うして超向は先成は人し秀  
しれた事は奥ふ志多に

一十七章よりいふ師在世れと記す 不易流形等  
云の記すも前より其處に於て向を法うた記  
事は再入ん此同き法く乃自證の言云の體自  
りし記す

一十八章に云す流形不易は其意はとせしむる  
易は事しと押してさういふと記すあり再言は  
十二卷の易流形は下に書はる無縛自縛と亦破  
しきうと記すなり何そ困難と云ふ此の不易

流形の如し何と記して其意を解くは  
維新の如し人ももや志しなりし不易流形を  
よりて後亦ありし物なり其意は何なりし不易  
流形と記し其意は其の不易なる也  
一或は言ふ如し其意は向る事と記し其意は  
なり人なりし人なりと記し其意は其の  
神の如し其意は其の如し其意は其の  
人なりし人なりし其意は其の如し其意は  
其の如し其意は其の如し其意は其の如し  
一三拾遺言に論す 穢流形ありしなりし人なり





後見て凡ゆるに於て因合を境れ人それ坊の温なりと  
那をり玄梅の集を中かして立居る事一人一ら  
は但衣集を其の集に於て見れ後見と考りて  
まゝと人れ集をよゆりてかゝりて物也

一井八書に云くの新撰思養集事人の心と云  
是先生れ意態を考りて事一斗ありて有り  
為りて有りて一と論れ罪を謝す其の也

一三指多一終れ同言曰先生例れ物なりと  
と一と一とをとりて一と一とれ勇士の  
同張張る大勇あれと將考るれば新刊了て

死後子孫得安く先生れ一物なりと  
れと一と一とをとりて蕭何其後嬰と一と一とれ  
宰相の師一と一とをとりて世れ多と一と一と  
惜むありて

右

本許六枚

自籍を論之

一物を師に於て一と一とをとりて此論先生の版拾  
披見と一と一とをとりて先生と一と一と在  
梨物と一と一とをとりて後功れ去る

中道に人々を導き一云より推来意弁をうぬりては  
これに虫を禱る終て市に同門を對して遊遊の義を  
す終て一云よりこれ師教れ其を口をれを記す  
河川一を河川に記す

一云遊遊と云ふ事人々を導き廿五年正月夜遊遊  
小形を河川に初まれこれ其意を考老人に流す  
てして中道に林れ同起て意を河川に記す  
中道常能法師の門人と成て遊遊を記す七八年正月夜  
病舎とわされて一日ふ百病を吐出たその次は  
後集不後て一天下に遊遊抄をくく其書中に極く

極小杜布也常能門實れ中と稱はる水云とくく者  
是より遊小抄の門に記す門人也これ其意を記す  
雜め義利成るといふ事者といふ句句息を等ふ  
すもその事遊遊に云三四人云とて其意を  
記す其意を記す其意を記す其意を記す  
撰集を考めて同候と識はる因舎不居候といふ事  
師南氏の事函不ぬる候とて同候と改めたり  
又世に其同候の事記す毎なる事記す  
其意を記す其意を記す其意を記す  
常能の候とて其意を記す

物此時宜も亦よしてかまなりと  
新白のありと伊勢風をえり

とつりありありとて入るは夜堂られをよみ  
よりとありありとて新白はありありと  
新白はありありとて常能を忍び  
しとてありありとて常能を忍び  
しとてありありとて常能を忍び  
しとてありありとて常能を忍び  
しとてありありとて常能を忍び

新白

とて身やよありありとて

新白のありと伊勢風をえり

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

とて身やよありありとて

茶不門人れ向多とつてその向と行ふ能付ふありし時集  
也来よりよらんてゆく次其意極と凡その後上つ  
に系心りとしりし等の集と累世とてこり行直成  
内ぐりむとてまじと能満も其都合四年教ふ言  
教方言相とと強り此との月に大津れ尚自あふを并て  
大意と心と控微細れあを其あをとりて毎日さく其  
予うあうとをと振く予少の耳れ今も七二年終ふ  
空のあをさむりてして師うま其縁のうと記す一  
今日ふるけくその後予あ氏ふ其極して其角に  
あ席今に能満其言れ為ふよりなりしそのころ猶

この出づして海に書集ありてへ慈を命ふと記す由る月  
寺ふ海に海しりていふるも予あうと其氏に違ふ此  
あしてかちりていふるも其師と師と縁れうま其  
也そのあをいふと其師と師と縁れうま其  
尾張ふこと其氏ふ其師と師と縁れうま其  
まうこれこり予あうと其師と師と縁れうま其  
小對面めん幸深ゆらんこりや橋所より海川芭蕉居  
再興して今も海に幸あり其言ま其師と師と縁れ  
隣を引して八月に海川の店をまうと師と師と  
約れまうと一も其師と師と縁れ

非昔問答抄卷之三

柳隣いひくはれは舟へお白折るあはれへ一とせしむる  
を桃隣振舞ひて四の白くくはれて見ゆ

七月十日の幸田全念此送るはを

りて感懐は

不慮をさかりて翻るり大井川

十念もも小粒あさりぬあまれ風

加多橋のわがあまもなう蟬乃夢

承知人猪口立系は清あまの柳

いねももくくも念

ゆは経て云く船中くゆは山は白くおちまはるり

その中清の掛橋の白もよくと教諭感くられり

大井川れ白くその時をくく加多あり器は平つ

くく不吉と生る再舞きとく一今津の山れ白能

ゆもやとらんれ柳程よくとゆありやうまくくたる

事ゆら不吉もゆもゆもゆもゆのゆくゆ六はゆ

老よ對面くくゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

きゆゆゆとゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



一々不富く一あり師此多き晋子也  
 師多れ曾肯て候より有りては物も一々  
 竟に継借を云勝と支をくはりやまの同云一  
 潜く晋子の海潜く符合せり是より再師此同推  
 予の風能く符合せり一奉一を承入て一審を明  
 多しき月師の云件の継借を云記出の村余寂  
 けして山林ふも此の地を記を候ひらまはる  
 教あるしやと入り晋白志より師も好くあ  
 れ一晋子のよく不き多てこれ教小あり一  
 八停手風流ありて作まれ御免面白物と云記本

其れ是て晋子と行ふと符合せり此とい  
 候より一晋子と照をひり一晋子と一師  
 針と云ふ一又同し師と晋子と一師の  
 一と教へ候ひ候より一と一師の  
 と候ん一細一晋子の同作を候んで一  
 然る所の流あり一晋子符合せり一  
 と又同日一候より一晋子符合せり一  
 脈ありや一晋子と一師と一師の  
 心候て一候より一晋子符合せり一  
 此れその候より一晋子と一師と一師の

漢も云ふた許子に對して平々多事此大をを  
 悉くする業が面白いとせしむる叶ひぬれども人の胸に  
 いて我國これ人お對して能く此を思ひしむる  
 とんたけ、要指れ法を傳ふ處をこけりし事日  
 多し標集とてんて事うらうらとけりし人  
 を許子なりりふ此の法を許子うらうらと人  
 此の法をうらうらとけりし人此の法をうらうらと  
 変と止むらうら今日れをハ性痴りて多事此大をを  
 此の法をうらうらとけりし人此の法をうらうらと  
 これハ思ふらうらとけりし人此の法をうらうらと

のまこれきき此の法は獨りて之れしてけりし人  
 此の法をうらうらとけりし人此の法をうらうらと  
 人なりとけりし人此の法をうらうらと  
 一を人ゆれい  
 一をれとこれきき此の法は獨りて之れしてけりし人  
 一はれ道不徳んおして此の法をうらうらと  
 一を人  
 一歳甲と此の法をうらうらと  
 一を人ゆれい  
 一をれとこれきき此の法は獨りて之れしてけりし人  
 一はれ道不徳んおして此の法をうらうらと  
 一を人  
 一歳甲と此の法をうらうらと  
 一を人ゆれい

非皆問答卷之二

廿







一釘礎をり門てくく志ありて然かく一是名人の能  
ありては許さるるありて然も是なり何難れ和子  
く得るる能を志せし名人を是れとすは小能得か  
れく一は換一師一能心ありて是下名の公ありて  
よはれ勝ふありては少く者案且

や〜〜や積ふ志せし能積れ面

志する者くは換一れ向なり如く案且は積れ面  
然く一は積り入心ひりありて是合は然るれは換  
一れ向や一は日名人の少れよは換一は言白  
毎向る一は一志とすて言下に大積れお〜〜

向後一は向仕換一は場ありては一はもは然師一は言を  
中人の言を言お教らりありやうは論合ハハありありと  
一は心中心仕換一師一は言を言入ありては言は  
一言おありては言入もは然とては言を言せし時よ

人言ふ醫者の給や〜〜

と昂積ふひひりては師言とすては言は辛麻妙あり難滞  
の座この向ありては言一は言下に積るれそのは向は  
も一言下に向を言は言のいありては感〜〜られりこの向考  
そく向ふありては言一は言〜も血脈れ言ありては言一は  
言は言を言のよく行て人の積られ言を言〜〜れを言

角不修れハ音子も能くまれよく付く能く不感一別  
 向足中記入人として書付たり予この時れを執とうて  
 高れ正る不繁を以て終して今日ふあ一はをきり予  
 う大悟發明を能くいつの時を去先生の傳しき向ふ不易  
 流行れらみたあ一は海の父母よりお續しき師ふ  
 血脈乃あるり、承りし理儀義如二集を賜ふ所し工  
 史と流くあつて一て直夜お高し障あり自然にの  
 血脈れ端を以て盡るなり九言下に血脈の而を大悟一能  
 備の處と歩破して取のまやをを法に師に血脈と大悟  
 一きるものれまのく不易流行れ而を端を以て而

血脈と夫とる能く不感く血脈とれりて出生はれ  
 多目鼻を自然に生るるなりこれ不易流行とわれ  
 て男をなり女と成るなり一友お先世不端しき能く易  
 流行をさあお終して向とあんと不事ありや一は  
 くれとくなり是血脈相續れ人おてなり能く授お枝葉  
 の不易流行より初る満されて元来出生れ血脈をく一  
 ちひそを能くなり人お生して後目鼻をく凡人お用り  
 きるは目鼻指とふお終て人おをさしとゆえ一やみ腕  
 必終をこれらふなりて人間成終し一お生るは能く  
 向ふたのてとくもかきる事あり師一先書ふはく不

易流新と書くこと世にこれなりまことんそゆると  
凡人や易流新と書くれば此の事には如向も  
しはふあしはとひはるる血脈は血脈なりしをそと  
いふなり己の事と云ふは血脈は事なり万葉の風流  
とらふはといふては血脈を万葉より結ぶるはなり  
古今集なりてその事出づるなりは枝葉なりこれ  
古今の變りなりてかゝる變り性なりは血脈は動りて  
つらふと相續しそふより今日の新も血脈を結ぶる  
く我くするはゆかりの事ゆかりの風をいふは及い  
くるはありんすと満たすなりきく血脈は事なり

近年血脈を結ぶる自はこれ故に秀逸なりてはゆかり  
和弁なりは折は一代は秀逸は多く是なりと書ゆ  
此の言はれはも一代乃秀逸と云ふはもその人ふ  
そとくはなりたふありはゆかりの言とすなり  
たはるおれゆかりの事なる人れゆかりの人の人れ  
吾一代は秀逸はゆかりの言はるは乃はゆかりの事  
りはゆかりの言はるはゆかりの言はるはゆかりの  
事なり人れゆかりの言はるはゆかりの言はるは  
志ありゆかりの言はるはゆかりの言はるはゆかりの  
志はゆかりの言はるはゆかりの言はるはゆかりの



何せ此あさりのもろくし一能階み柱多し凡門あり  
 行むを食ちりとも一能此勝れそ然而をん出  
 きたらんそ能んさるあやあらん千里跋をりしを  
 此新て沙やうしそりん能通満きし此のそ此  
 一耳のり跡<sup>さうく</sup>礼<sup>らい</sup>禮<sup>らい</sup>をん是とさうしそ  
 里ふ成る事ふあし此の路通也といふ者と凡此  
 能階も礼<sup>らい</sup>禮<sup>らい</sup>をり此れも礼<sup>らい</sup>禮<sup>らい</sup>をりつらやうして  
 と能<sup>の</sup>所<sup>の</sup>れしそりれともそ生れ急な路通満き  
 と能<sup>の</sup>れ者<sup>を</sup>をあし法を山しそあ事一を<sup>し</sup>極  
 あり先生法をさうりそあ時そあ凡門人控

みさうみ成て法をさひつら<sup>こ</sup>南<sup>なん</sup>れ門人酒堂  
 と本乃とくは月ひをゆふ事そ在せお柱<sup>ち</sup>て是湖  
 南れなうはられそたすしそあ  
 一物して向れあしそあそあ此<sup>こ</sup>事一そあ  
 う今日あし所も全場<sup>ぜんじやう</sup>所<sup>じ</sup>智<sup>ち</sup>於<sup>お</sup>事<sup>じ</sup>なりし此<sup>こ</sup>向<sup>む</sup>れ  
 お依て念息せあそ<sup>そ</sup>感<sup>かん</sup>此<sup>こ</sup>賜<sup>み</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>みん能<sup>の</sup>そあ  
 の放<sup>は</sup>ふ門<sup>もん</sup>人の向<sup>む</sup>れ名<sup>な</sup>あれそあしそあ何<sup>なに</sup>て人<sup>ひと</sup>能<sup>の</sup>能<sup>の</sup>  
 者<sup>もの</sup>多<sup>おほ</sup>しそあ師<sup>し</sup>の五<sup>ご</sup>千<sup>せん</sup>多<sup>た</sup>来<sup>きた</sup>方<sup>かた</sup>と能<sup>の</sup>く名<sup>な</sup>人<sup>ひと</sup>と何<sup>なに</sup>か  
 うひぬ<sup>ひぬ</sup>予<sup>よ</sup>の今日<sup>けふ</sup>初<sup>はつ</sup>ての能<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>れ<sup>れ</sup>き<sup>き</sup>切<sup>き</sup>を<sup>を</sup>入<sup>い</sup>年<sup>ねん</sup>月<sup>げつ</sup>とさる  
 時<sup>とき</sup>少<sup>すく</sup>も初<sup>はつ</sup>て子<sup>こ</sup>細<sup>こ</sup>ち<sup>ち</sup>し<sup>し</sup>却<sup>かえ</sup>て師<sup>し</sup>より遠<sup>とほ</sup>くお増<sup>ま</sup>る名<sup>な</sup>人

と成る所一その故凡所と云ふ人件其れ山本より出て  
 師一代の名人なり予の師の名人凡門中と成て師一代の  
 予と号せしめて胸中に入ると入予の代の名人とな  
 合と終時を言ふ事ある名人を凡成候し中し中し  
 者亦あり凡成の年一前子血極と終た三神と云け  
 て師れ亦おのて大快楽の代に能得の處と破て自由  
 と得たり自證れ詞也と悟む人をも入し一和字三神  
 凡入し自證と云ふ事一為の流れ能得ふ所の凡血  
 極と終の門中なり

一不易流行を言ふ事一不易に成るれを能得る凡成は  
 易也流れ其れ深し其れ年一に成るれ能得明の發句に  
 於て其れ少<sup>まじ</sup>流る味あり於て附向して其れ能得  
 一前向ありて其れ其の盡しり其れ其れ其れ其れ其れ  
 能出り其れ其れ其れ

靈心と始はく其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

たし其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

若燒の其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

又若燒の其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
 印表其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
 極し其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ



あゝ破りて

はるかとう門てゆくもあつた

と出せりて是より生るる園也主後師と語るに  
笑ふよりりて後様とや探し多しと云ふるのうまき  
とわけて遠離れ能く借を致せり定まると板抄さねた  
志しは平ハ獨流りして

火舟の焼火ふりしと 壺 菊

空ふりては花の種をわらふと焼き花流る必は一献を  
納らふや花のさゆの青事とさうて美人さるるを座  
見たりやいかに花をいふか自に消向七形はしと

狂女の論

雲ふりては花の種をわらふと焼き花流る必は一献を  
納らふや花のさゆの青事とさうて美人さるるを座  
見たりやいかに花をいふか自に消向七形はしと

佛壇に疎子に月如りしと

行くはれ背中と照るは麦れ月

舞臺の上を鷹渡りしと

あゝの夢の事れ花ハ是か花なりと云ふものや玄梅集  
に云ふ事れ花と云ふ遊借は是は後様如花と云ふてあつた  
をわらふ花能く借あり又精をわらふ事と云ふ能りふ  
ては昔ハ

月小二百毫、惣れ精進日

只精進をたかしくし、まじりたる

なりて、是ハ新しく進階といふ事なり

物多し、此等より上は精進を旨

と云ふ、是ハ新しくたれまゝとわゝし、しゝとらた

祖父祖母の精進を是間まひりて

と云ふ、是ハ新しく、いふ中たれ精進をたわのゝ為りて

なり、云向なり、是むり、れ句ふかた、事なり、新し

く、いふた、是なり、明々明後りの流流、是なり、事なり、

く、江山ふ留り、前、端ふ云、いふ、詞、子、師、進、此、れ、後、流

新、難、なり、不易の向なり、て、は、修、然、まゝ、なり、と、云

ふ、難、く、也、せり、此、なり、い、ふ、一、尋、滅、後、に、流、新、難、なり、と

中、ハ、何、と、也、不、易、流、行、ハ、進、階、の、要、也、進、階、を、止、めて、余、れ

り、子、持、り、括、別、の、と、也、進、階、法、ハ、何、く、中、ハ、不、易、流、行、

と、云、なり、と、云、て、叶、り、也、若、也、叶、り、と、云、て、事、ハ、不、易、流

行、と、云、り、の、進、ハ、其、の、ハ、進、ハ、血、脈、に、續、の、人、れ、句、ハ、此、より、出

ず、と、云、ひ、と、云、く、不、易、流、行、ハ、此、の、切、本、と、云、り、と、云、る、と、の

也、進、別、進、階、と、云、り、の、不、易、流、行、ハ、云、なり、と、云、ハ、亦、

何、と、云、事、も、なり、と、云、り、の、不、易、流、行、ハ、云、なり、と、云、ハ、亦、

也、流、行、ハ、此、の、切、本、と、云、り、と、云、る、と、の、切、本、と、云、り、と、云、



少れは通くくの本等々を地者也と云ふ應在と云と得くく  
 去つれとも地也十句お七八句ハ新句也二句を天地と  
 動つた句也是地也の云くく一也云々地也をくくお猪の  
 ころり一維持の時雨なく血脈の句言ひ出せり暗く其は  
 飛りくく一血脈と姓お猪さるさる一ハ毎句毎の  
 節あり一お不眠ひくく一お猪お居て居たり又面白く  
 ねおもめたり一と云言ひ出れ去るは行く探集の時  
 様たぐひの喧たぐひ集といふ面白く一と云自おん憐一悲一さる様  
 ね喧たぐひ集なり新一と云一は方くく一はるるはくくお集お  
 へくくおと子も居くく一継踏く踏の後立仰り見られ

是けは通くくく一と云くく一生れ付く去と破れお集あり  
 とも士はけお集たりくく一と云通の集り一勇ハたぐひ集ありとも  
 ありくく一とも善悪のふれさる人ハおの集り一此はの集れ  
 継踏をくく一お岩依別をぬの風一白も竹一今世お  
 人依様集お継踏たかみさるて面白く集り也と云集  
 たりくく一お用れ白と出せり別をぬお岩依の風熱吟せ  
 けお人いそは様たぐひの風よ飛入事一と云んや去く一白お  
 ありくく一と云くく一と云くく一お明の人ありくく一お入れ  
 継踏をくく一と云方を成す一お集り之をれありくく一  
 の時暇くく一人其くく一おの風を揚たりと云ありくく一お集

中ふ流りたるを不慮と様とさすにたれり  
 可事一乃ふ荷字越人わし時之の何し時之何  
 もつらうしんをさうしと旨阿し時と乃るふ岩俵別産  
 木のつらう其時よりあらまれば時代の昔れよりて  
 俵れ越急なるとなりし時織乃せ不何そ翁と何  
 く流りせとくしやうあらんや不師れ悪ふ事て  
 阿し時と乃る極それとも七乃る時八時の何  
 せつらうしんをさうしと旨阿し時と乃るふ岩俵別産  
 様不是座れわけぬ徳授り今世に送經れ能  
 階の何ハ天下に之四人ありて一乃る阿し俵れ不考乃

後様れ時庭をぬきて流りたれとも難しといふ事  
 是くも知あらしやんてむせらるの門人と目と同一と流り  
 人なり一乃人性不血孫を續して為時階門東れ内記皆  
 とくしんをさうしと旨阿し時と乃るふ岩俵別産  
 未定来一乃一乃濃大垣子川といふ者此風なり次上産  
 根の門人なり時流りしやんてむせらるの門人と目と同一と流り  
 いふも生れ越後屋れも代たれぬ能階も人情狂もそ  
 けうもみゆるとさうし胸中せあぐして家ゆると方お  
 ちんをさうしと旨阿し時と乃るふ岩俵別産  
 以ゆるとめしと得るとさうしやんてむせらるの門人と目と同一と流り

手と脚の法に祖れ来つて宗血脈を傳うるは是の  
祖血脈を知りて人なれば也

一匡世の中は切なき古き古き法に用はれ法を被是  
のせしめしなり師は是と自らを以てしるべきなり  
復た法にて他は獨り人なれば今日れ傳明日は同  
しなりす先を以てしるべきなり師は是と自らを以て  
らんやれども小年ふとては是なり師は是と自らを以て  
ははれしれ宗師を以てしるべきなり師は是と自らを以て  
すの宗師明を合して承るなり

雜語問答抄卷之二終



